

イギリスからの春の便り

笹川 真理子

イギリスでは「三月の風と四月の雨が五月の花をもたらす」というのが、季節を表すことわざとして有名です。しかし自然のなせる業なので、年によって違いがあり、昨年などは五月に雨ばかりで、花が例年より一か月遅かったこともあります。概ねそんな気持ちで春を待ちます。

イギリスと言っても北アイルランド、スコットランド、ウェールズそしてイングランドという、地方というより小国から成り立っている英国では、それぞれの地域に守護聖人がいて、三月一日はセント・デーヴィス・デーというウェールズの守護聖人を祭る日。我が家では夫がウェールズ出身なので、この



日が結婚記念日です。ちょうどあちこちで水仙が咲き乱れる頃でもあり、この日、ウェールズの人達は胸にウェールズの花、水仙をさして誇らしげです。



▲緑色の服を着て、頭には花で飾った帽子を

また、三月一七日はアイルランドの守護聖人セント・パトリックを祭る日。アイルランドの人達はクローバーを胸に飾り、緑色の洋服を着るなどして愛国心を表します。そして

この日はアイルランドの誇るべき飲物、ギネスが格安の値段でパブで振る舞われ、本土アイルランドやアイルランド移民の多いアメリカでは、大掛かりなパレードが行われます。

日本では春分の日を境に春と感ずるのでしようが、イギリスでは春分の日次の日曜日、今年は三月二十六日に始まる夏時間から、いよいよ日照時間も伸びてくるようでワクワクします。冬時間から夏時間になる時には、一時間早起しなればならないわけですが、この切り替えはいつも日曜日であり、うっかりしてもビジネスのアポイントメントにはあまり差し支えがないように工夫されています。

まだ寒い内から可憐な姿を見せていたスノードロップに取って代わって、そこかしこには、クロッカスがかわいらしい頭をもたげてきます。そして水仙の黄色とムスカリヤス

ミレのブルーやパープルが鮮やかなコントラストを描くようになると、本当に春の訪れを自然の中に見る思いがするのです。

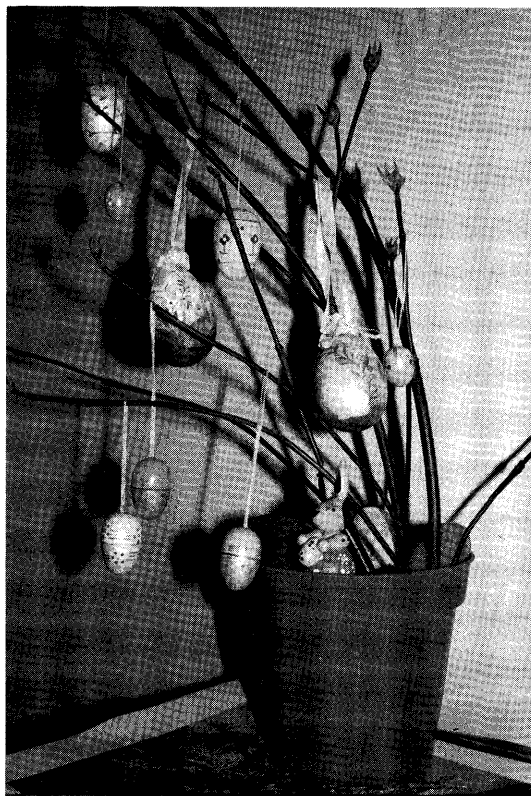
今年四月一六日に当たるイースターはそんな春の祭典。クリスマスにクリスマス・ツリーを飾るように、枯枝に色とりどりのイースター・エッグを吊り下げてイースターを迎えます。イースター・カードはもろろん、多産の象徴である兎や再生のシンボルである卵の形のチョコレートを贈るのも習慣。日本ではバレンタイン・デーにあやかっつて、三月のホワイト・デーがチョコレート会社の思惑で作られましたが、キリスト教の伝統のある国々では、バレンタインデーの次にはこのイースターが控えているため心配ご無用。

本屋のショーウィンドーに「ピーター・ラビット」が登場するのもこの頃です。当日は、あちこちでイースター・ハット・コンテ



スト、イースター・エッグ・ハントなど楽しい催しが行われます。しかし何と言っても圧巻は、イースター・サンデーにロンドンのテムズ河南岸にあるバタシー公園で繰り広げら

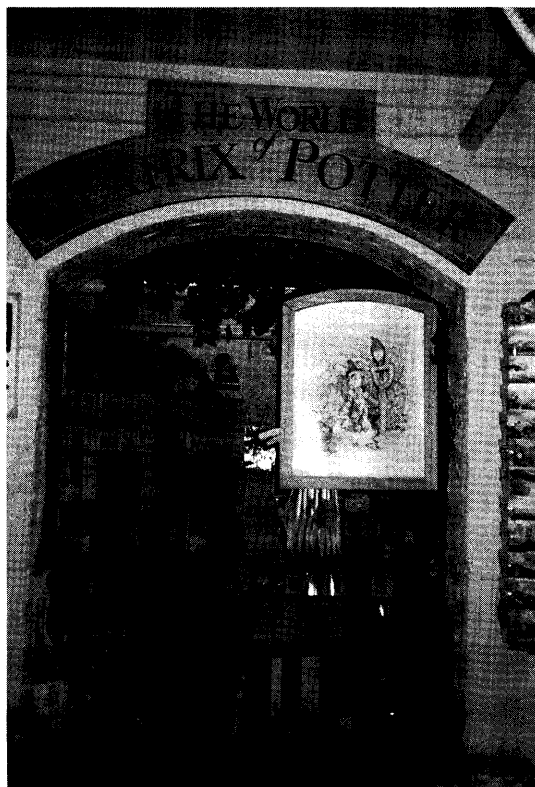
れるイースター・パレード。工夫を凝らした山車だしの数々に、親子連れが歓声をあげます。また、イースター休暇になるとなぜか思い出さずにはいられないのが、イソップの「ア



▲イースター・エッグ

リとキリギリス」のお話です。日本人はあくせくと働きバチのようだとたとえられますが、イースター休暇中のイギリスの日本人は、どうしてもキリギリス。この機会にと、

あちらこちらへとドライブや旅行に出掛け浮かれる姿が見られます。一方イギリス人はというと、もちろん旅行をする人もいますが、たいていは額に汗し、



▲ピーター・ラビットの小物コーナー

土にまみれてガーデニングに勤しむアリとなるのです。冬の間、傷んだ樹木の手入れをし、土を耕し、肥料を入れ、種を蒔き……。この期間にイギリス人が群がる所は、ガーデンセンターと、相場が決まっています。この努力があつてこそ、夏の美しい庭が演出できるのです。

ロンドンには幸い日本食糧品店が多くあり、お金を出せば何でも手に入りますが、私は食いしんぼう（節約家でもある？）。プラントーでできるシソや三つ葉は言うに及ばず、ミョウガ、フキ、カボチャ、エダマメ、ソラマメ、ニラ、ゴボウ、カブなどを家庭菜園で栽培しています。これらの収穫を夢見て、春には畑仕事です。春の味覚、山菜の中でもわらびは、ロンドンのリッチモンド・パークにニョキニョキと生えるので有名。もちろんイギリス人にはその貴重さはわからない

いでしょう。

どちらかと言うと季節の食べ物に鈍感に見えるイギリス人にとつての春のごちそうと言へば、まずイースター前の精進期間の前日、シュロープ・チューズデーに食べるパンケーキかもしれません。四〇日間、肉やミルク、卵などを断つため、その前にこれらを処分してしまおうとできた習慣なのです。ホットケーキと言うよりはクレープのように薄いの

で、何枚もおおなかに入ります。

一五世紀頃、パンケーキを焼いていた主婦が礼拝の鐘を聞いて、フライパンを片手に教会に急いだことに端を発しているパンケーキ・レースが、ロンドンの中心コベント・ガーデンで開催されて、人々を楽しませています。

いよいよイースターが近づいてくると、ホット・クロス・バンの良い香りがパン屋さんから漂ってきます。これは、白い十字のつ

いた甘いパンのこと。もともとアングロ・サクソン人が、春分の日には四季を表す十字をパンの上につけたのが、後にはパンの膨らみを妨げる悪霊をはらう印として残されたと言います。今ではグッド・フライデーにホット・クロス・パンを口にして、キリストの苦難を覚えるのが伝統になっています。

このホット・クロス・パンにちなんでイギリス版「岸壁の母」の逸話があるのでご紹介しましょう。

ロンドンのドックランドといえは、水際開発の先端地ですが、ヴィクトリア朝には「日の沈まない」といわれた大英帝国を往来する船の港として大変賑わった所です。そのイースト・エンドと呼ばれるロンドンでも庶民的地域の一角に、船乗りの息子を持つ未亡人が暮らしていました。

ある春浅い頃、イースターに息子が帰ると

いう知らせに、母親はホット・クロス・パンを焼いて待ち侘びました。ところが、息子は帰らぬ人となってしまったのです。それでも母は毎年息子を思い、ホット・クロス・パンを焼いて待ち続けたのです。時がたち、一八六五年、その未亡人の家の跡にバブができました。その名も「ザ・ウイドーズ・サン」なるバブはいまだに母の愛の伝統を守り続け、毎年一つずつホット・クロス・パンを加えているのです。

バブに行くと、カウンタール脇に、年季の入ったホット・クロス・パンのコレクションが、天井から吊るされているのが目に入ります。ある年は小さく、ある年は平たく大きく、黒く炭化しなからもしっかりと形をとどめるパンには、悲しくも温かい母の愛の結実が見受けられます。店内にはセーラー帽や、船の絵など、海にちなんだデコレーションが

たくさん。グッド・フライデーには大勢のセーラーがやってくるそうなので、一人息子を待っていた母は今では多くの息子に囲まれて、大喜びしていることでしょう。

四月二三日のイングランドのセント・ジョージズ・デーは休日ではなく、日本の春のゴールデンウィークには及びませんが、五月の初めと終わりには、メイ・デー・ホリデーとスプリング・バンク・ホリデーがあって、連休になるようになっていきます。この頃は田舎の方でメイポールを囲んでダンスが披露され、お祭りが開催されます。花の豊かな季節には、のんびりとピクニックをする家族連れも多くなります。

日本の気候のいい地方からヨーロッパに來ると、冬の闇の暗さに気の滅入る人もあるようなのですが、雪の新潟育ちの私には、イギリスの天候は故郷のものにそっくり。春を待

つ心は、土地が変わっても同じと思われま
す。日本での春は新入学の季節で心も躍る頃
ですが、九月が学校の新学年の始まりのイギ
リスでは、春は社会的状況の変化というよ
り、自然の変化を素直に楽しむ時のよう
です。

(舞々同人・ロンドン在住)

